

## 三重県答志島の青年宿・寝屋子制度と青年期発達に 関する基礎的資料

澤 田 英 三

Adolescent Development at the Young Men's House (Neyako)  
in Toshijima Island, Mie Prefecture

Hidemi SAWADA

There are young men's houses, called "neyako", on Toshijima Island, Mie Prefecture.

The present study aims to clarify features of the young men's houses, using a participant-observer methodology and the interview method. At Toshijima Island, before leaving junior high school, the young men's parents ask Neyo-oya parents to promote social education for their children to live in the community. The young men are closely related to not only their true parents but also the secondary parents (Neyo-oya). After eating supper at home, the young people get together in the young men's house (neyako) almost every Friday night. At the neyako, social training is given to the young men by the Neyo-oya parents. They learn precious moral values, about human relations with and respect for others in the community. Moreover, they obtain useful advice on their career possibilities, and how to deal with the opposite sex.

Key words: adolescent development, young men's house, cultural development, traditional social system

本研究は、日本に唯一、青年宿が現存するといわれる答志島について、答志島の概要と青年宿（寝屋子制度）の特徴をまとめることにある。そして、今後の関連研究を進める上での基礎的資料とすることを目的としている。

### 1. 日本における青年宿の特徴

まず、日本の青年宿・若者宿について、概略を述べる。青年宿とは、「若者組が関わる生業や労働、警防、性交渉と通婚などの諸機能と深く結びついていることから、わが民俗社会でも常設的または臨時的寝宿、夜業宿、警防詰所や集会所、娘宿と結びついた婚舎型の宿など、さまざまなものがある。宿では年長の宿頭が統制するが、個人宿だと宿の主人や主婦が監督することもある」（高橋、1987）とされている。つまり、各地域において若者がそこで寝泊まりし、地域内で若者が活動・活躍する若者組と結びついた宿である。それは、生業とする仕事（多くの場合は漁

業や農業)や地域の自警活動(夜警や防災・復旧活動)、結婚やその前段階としての男女交際など、地域の中で若者が行う諸活動と結びついたもので、青年宿がそれらの活動を支えていた。宿の形態は、常設的あるいは臨時的寝宿、集会所型あるいは個人宿(一般家庭)型など、さまざまな形態があり、ほとんどの場合は宿主(家の主人)や年長の統率者が若者たちを監督・指導していたのである。つまり、学校における青年教育がまだ行われていない時代において、地域の青年に対する職業教育や社会化教育の一端を担うだけでなく、青年の地域における諸活動を支援していたのが青年宿なのである。

それでは青年宿はいつ頃から始まり、どのような種類のものがあつたのであろうか。青年宿の起源については明確な根拠は見当たらないが、熊谷(1942)によると、江戸時代から各地で必然性があって生まれてきたもので、その形も機能も地域によって異なっていたという。少し長くなるが、江戸時代から誕生したと思われる青年宿についての熊谷の記述を引用しよう。

「我が国の若連中も、たいいてい宿をもっていたが、これはその本質において、諸民族の間に見られる青年集会所と異なるものではなかった。これらの宿の名称には若衆宿、若者宿、若勢宿、寝宿、泊り宿、若宿、おやしよ、若イ者部屋、小屋など、種々のものがあり、その機能や習俗も各地決して一様ではなかったが、宿は若連中の枢要な訓練の場であり、同時に愉快的仲間づきあいの場所でもあって、若者仲間の生活の一切の中心であつた。すなわち常の日には毎晩、夕飯をすますと若い衆はみな宿へ泊まりに出かけ、農村ならば藁仕事、漁村ならば網の目を繕いながらよもやまの談笑にふけり、ときには力競べや食べ競べもし、所によっては毎晩部署を定めて夜警に廻つた。一わたり仕事がすめば、歳たけた者は夜遊びに出かけ、宿入りしたばかりの年少者は、提灯をもってその供をしなければならなかつた。昔の農村のことであるから高尚なことばかりあつたとは言えないが、かような飾らない自然な団体生活の中で、若者たちは自ら村のことや自分自身に対する認識を深め、世の中の善悪の標準をも悟り、かくて村の立派な若い衆として教育され、訓練されていった。祭礼行事の準備や、遭難船の救助、消防なども、すべて宿を通じて、宿に屯する若者たちによって行われたのである。

宿には常設的なものとある期間だけの臨時的なものがあつた。漁村の宿の多くは常設的であつたらしいが、農村ではたとえば9月節句から翌年3月節句までというように、冬の農閑期だけ宿に泊まるのが通例であつたようである。また宿には、寝泊まりする合宿所であつたものと、単に集会の場所たるに過ぎないものがあり、また若者だけが集まるもの、若者と娘とが一緒に集まるもの、娘だけが集まるものなどがあつた。娘だけ集まるものは娘宿であつて、地方によって、コメラベ宿、オナゴ宿などとも呼ばれた。昔は娘の間にも、年齢による仲間の団体(娘連中)があつたようであるが、若連中の単なる附属の観があつて、若連中のような著しい団体ではなかつたらしい。娘宿は、概して若衆宿よりは早くすたれた。

どんな家が当てられたかといへば、大別して私人の家を使用した場合とそうでない場合との二つがあつた。前者は広い家をもつた土地の名望家(漁村では網旦那)、若夫婦の家、新たに分家した家、単に集合に都合のよい家などが選ばれ、また広敷とか長屋とか、つまり家屋の付随的な部分が宿になっていた場合もあり、若者頭や世話人の家が宿になったり、宿を村内各軒廻り持ちにした地方もあつた。後の場合は、神社や寺院の一部など村の公の建造物を使用するもので、いま地方の漁村などに多く見受ける宿としてのりっぱな青年会館もこの系統に属する。一つの部落の中にある宿の数は、各地の特殊事情によって一様でなく、ずいぶん多くあるところもあれば、きわめて少ないところもあつた。

かように宿は、若連中に必然的な施設であって、宿のない若連中を考えることのできないほど、両者は密接な関係をもっていた。前に述べたように、若連中の眼目は、村の若者たちをほんとうの一人前に育てあげることであったが、それは実に宿を通じて行われたのである。」(p.30-33)

そして、明治時代に移行した後、各地域で生じる青年たちの無秩序な活動に対して、政府として青年団を組織化する形でそれ以前の若者組を取り込んでいったのが、若者組→青年団への経緯であった。青年団の活動内容は地域によってさまざまではあるが、政府が各地域で青年団を組織することを命ずることによって、国として青年教育に関わり、富国強兵政策と結びついたものであった。

本研究の対象とした答志島の青年宿・寝屋子は、寝屋親個人の家に青年数人が寝泊まりする青年宿であり、職業的機能は薄れている。しかし、青年たちは寝屋親と第二の親子関係を結び、寝屋親によってこの地域で生きていくための社会教育を受けている側面が強い。それと同時に、青年たちの仲間で楽しむ遊興の場所としても重要な役割をもっていると思われる。

## 2. 三重県答志島

三重県鳥羽市答志島は、伊勢湾の入り口、鳥羽港から北東約2.5kmに位置し、東西約6km、南北約1.5kmの細長い三重県内最大の島である(図1)。答志島には、東部の答志町(答志地区と和具地区)と西部の桃取町がある。答志町の人口は、2000年の時点で、470世帯1,672人であり、本研究の対象となる答志地区は356世帯、1,471人であった(表1参照)。人口のピークは戦後の1950年代から1960年代であり、2000年以降の人口減少は顕著であるが、それ以前は高度成長期以降の極端な人の流出はなく、他の島しょ部と比べても比較的安定した人口動態であった。

答志島は、伊勢湾にも太平洋にも漁場が近いという地の利を生かして、さまざまな漁法による漁業が盛んな島である。答志島は、答志地区、和具地区、桃取地区に分かれており、中でも伊勢湾に面した漁場に近い答志地区は若い世代も含めて最も漁業者が多い。答志地区では、一本釣り漁や延縄漁、建網漁、底引き網漁だけでなく、複数の船で行う曳網漁に、貝類や伊勢エビなどの素潜り漁なども行われており、季節に応じてねらう魚と漁法を変えて漁業を行っている。答志漁業組合の魚市場は、毎日未明から夕方までさまざまな魚が水揚げされ、中京地方や京阪神からの仲買人の競りが断続的に行われている。このよ

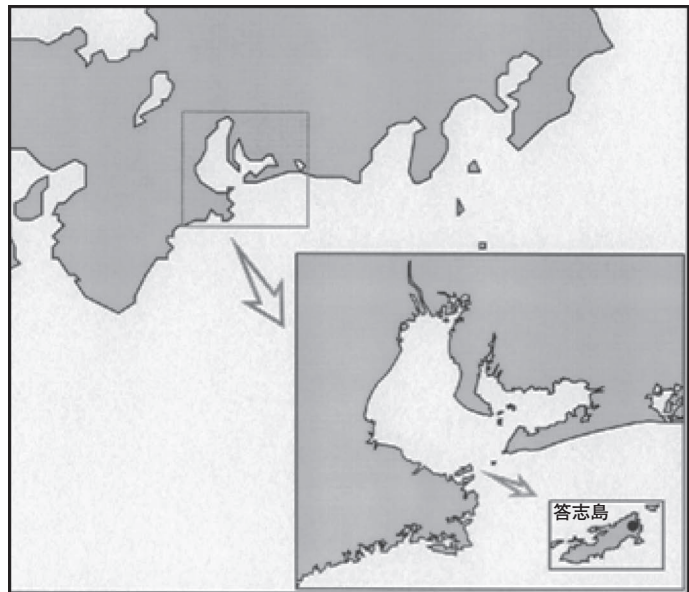


図1 三重県鳥羽市答志島の地理的位置

うに、さまざまな漁法によって年間を通して漁獲が得られ、かつ大量消費地域からも日々買い付けが行われることが漁業者の生業を支えているため、他の漁業地域にみられる高度成長期以降の急激な人口減少がみられないのであろう。

答志島の漁業は、2・3隻の船で行う曳き網漁もあるが、大資本が投入されていないために、基本的には個人単位、家族単位で行うものが多い。家族単位の小型の船で、他よりも早く漁場に到着して、他よりも多くの漁獲を得ることができるよう、漁業者間での競争が激しい。しかし、漁業者の生活全般も他との競い合いであるかというとはまったく異なり、さまざまな協力や組織の下で答志というコミュニティが機能し維持されている。そのコミュニティの団結力を高めているのが、寝屋子（青年宿）であるとほとんどの住民は話す。そしてこれは、ある政策にもとづいてつくられた組織ではなく、答志が置かれた地理的・自然の環境のもとで歴史的な必然性がある組織され、他地域や時代の権力によって導入された政策をうまく取り込みながら形成され、実質的に機能してきたものであろう。

表1 安政期以降の答志町（村）の人口推移  
（鳥羽市史編さん室（1991）より作成）

	戸数	人口
1857年	278	1,212
1879年	307	1,527
1888年	330	1,744
1900年	335	2,141
1911年	372	2,506
1919年	383	2,557
1930年	442	2,775
1940年	448	2,608
1950年	532	2,976
1960年	538	2,880
1970年	558	2,579
1980年	541	2,358
1990年	533	2,257
2000年	509	2,013
2010年	470	1,672

### 3. 答志における寝屋子制度と年齢階梯

答志地区では、現在でも青年宿（寝屋）が存在している。これは現在、わが国唯一といって差し支えないであろう。答志島の他地区（和具、桃取）や他の島しょ部にもかつては青年宿が存在していたが、高度成長期に姿を消していったという。答志地区は、本州からは島内で一番離れているが、それだけが青年宿が現存している理由ではない。たとえば、島がちな志摩半島には多くの島が点在しているが答志島だけに残っている。答志島よりも沖にある神島は人口が減る一方で、そもそも青年宿を行う若者がいないのである。このように、答志島において青年宿が残った背景には、地理的要因やそれに伴う交通の利便性、経済的要因や時代的要因など、さまざまな要因が重なっていると思われる。加えて、答志島の寝屋子制度は、昭和60年に鳥羽市の無形民俗文化財に指定されたため、近年、答志においても青年宿によってはそれが形骸化してきていると古老は話す。それでもなおかつ青年宿を存続しなければならないというコミュニティの力になっていると思われる。

答志島には年齢によって集団や役割が存在する。これは文化人類学や民俗学で概念化された議論されてきた年齢階梯に相当する。年齢階梯制とは、「性と年齢・世代を指標に人々をグルーピングする年齢集団のうち、社会全体を通じて厳しい年長序列関係の制度化が見られる場合」を指す（高橋、1987）。答志では、青年団に入る前の「子ども」、中学卒業（15歳）から27歳までの所属する「青年団」、青年団を卒団後の30代に所属する「消防団」、40代に役割が与えられる「漁業

組合」, およそ50代に与えられる「組合幹部」に大別される。また, 祭りにおいてはこれとはまた異なった年齢による役割が存在する。

#### 4. 青年団の役割

明治時代に政府によって組織化が義務づけられた全国の青年団は, 戦後, 青年団そのものが消滅したり, 組織の名称は残っていても, 所属する青年が存在しなかったり活動の実態がないものが増えてきている。また, 現在も名称や構成員が残っていても, その実態は40年前の青年が活動している例もある。いずれにせよ, 青年団活動は戦後急激に弱体化し, 学校教育と相反する存在として地域から姿を消していったのである。そのような中で, 答志青年団は名実ともに現在も存在し, 実質的な活動を行っている。

答志の青年団は, 地区内に専用の部屋を有している。青年団長は団員内の最高学年から選ばれ, 年齢によるピラミッド構造で担う役割が決まっている。そして, いくら有能な青年であろうと, 1年間の青年団長の任を終えたら, 青年団を去るのである(顧問という形で意見を求められることはある)。青年団が担う仕事の内容は, 年間を通して行われる地域の祭りや行事の企画運営の一部に携わっている。特に若い男子だからできる力仕事を含めた地域の活力として住民の期待は大きい。また, 毎晩2回の夜警を当番で行っているのも青年団である。

答志に住む青年は, ほとんどすべて中学校を卒業すると青年団に入団する。寝屋子に入る時期と入団する時期は同じであるが, 答志から離れて暮らす者は青年団には入らないし, 途中退団した者でも寝屋子には入っており, 答志を離れても寝屋子仲間としてはあり続けるというように, 両者はまったく別の組織である。そのため, 青年団の仕事をする際も, 寝屋子単位で仕事が分担されることはなく, 強いてあげれば, 年1回の神祭の演芸大会に出す出し物が寝屋子単位であるという点だけであろう。その意味では, 青年団は地域における公的性質のものであるのに対して, 寝屋子は地域内で私的に結ばれた関係だといえる。

#### 5. 答志における寝屋子

鳥羽市の広報誌に平成11年に紹介された寝屋親と寝屋子の対談は寝屋子制度についての青年側の意識や寝屋親の思い, 考え方が紹介されている(鳥羽市, 1999)。そこに紹介されている対談や筆者の聞き取りをもとに, 以下に答志における寝屋子の概要をまとめた。なお, 「寝屋子」とは, 寝屋を同じくする青年のことを指すが, 寝屋という宿そのものを寝屋子とも呼んだり(「寝屋子に行く」など), 寝屋親-寝屋子の関係を指すこともある(〇〇寝屋子)。

##### (1) 寝屋子の概要

寝屋子に入る時期は, 中学卒業の時点から27歳までの10年あまりであり, これは青年団に在籍する時期とも重なる。かつては, 同じ宿に入る青年は年齢が異なっていたが, 現在では学年ごとに分かれて同じ寝屋子に入っているのが当たり前になっている。

寝屋子を受け入れる家庭は, 地域内の一般の家であり, 青年が寝泊まりするための2階の1室を提供することになる。通常, 青年はそれぞれの家で夕食をすませた後, 寝屋子に集まり, 泊まって, 翌朝帰宅する。中学を卒業してすぐに漁業に従事していた時代は, 寝屋子に毎晩泊まり



に行くのが当たり前だったようだが、島外の高校に通うのが一般的になってからは、1週間に1度、週末にしか寝屋子に集まらなくなったという。

青年たちは、寝屋子に入った当初は毎日が修学旅行気分、夜遅くまで話をしたり、ゲームをしたりして騒ぐことも多いという。寝屋親や家族は、青年たちが夜を通して寝屋子部屋で騒いでいるのを、近所迷惑にならない範囲で我慢して黙認していたという。このように、思春期の時代はもっばら気のあった青年同士で過ごす時間が楽しく、そのために毎週寝屋子に集まってきていたのだ。

寝屋子として実際に泊まりに通う時代は、中学校卒業から27歳までの間である。その後も泊まりに行く場合もあれば、それ以前に結婚をして泊まりには来なくなる場合もあるが、27歳に達すれば一応、寝屋子を卒業となる。しかし、単に卒業して関係がなくなるのではなく、寝屋子仲間「朋友会」をつくり、仲間は「朋輩」と呼び合って生涯関係が続くことになる。

寝屋子の起源は江戸時代だといわれている。その時代は、漁撈のほとんどは人力であり、船の動力となる漕ぎ手、延縄や網を引き上げるための労力、水揚げなどの諸活動など、漁業を生業とする者は、決して一人だけで行うことはできなかった。また、地域生活、日常生活においても、冠婚葬祭や船掃除、防災、災害時の対応などを地域に住んでいる人が助け合いながら行っていかなければならない時代でもあった。寝屋子はそのような歴史的・地域的状况の中で必然的に生まれてきた、青年を教育する場であったと考えられる。

## (2) 寝屋親が選ばれる経緯

答志地区においては、男の子どもをもつ親たちは中学1年の頃から卒業時にお世話になる寝屋親探しを始める。仲のいい子どもたちが自分たちでグループを作り、寝屋子に入る際にその子どもたちの親が集まってどこに息子たちをお願いするかを話し合う。通常、親たちは自分よりも歳が若くて地域の中でさまざまな活動をしている人に寝屋親をお願いする。親たちは年が違っていても、地域の中で青年団や消防団で活躍する姿を見ているのだ。そして、親たちの間で意見が一致したら、その候補の家を訪問して、年長者の親たちが年下の者に頭を下げて「うちの子どもをよろしく頼みます」と頼むという。寝屋親を受ける際には、「俺に子どもたちの教育を任せるのやな」を確認して引き受けるという。ここで実の親子関係に続く二次的親子関係が結ばれるのである。

それでは、実際に青年の教育を担う寝屋親世代の年齢はどうなっているのだろうか。表2には、1998年現在の答志の寝屋子の現状と寝屋親-寝屋子の年齢差などを示した。

この表から、当時答志地区にあった16寝屋子のうち、寝屋親と寝屋子の年齢差は、11歳から44歳と大きな幅があることがわかる。また、青年の親と寝屋親との年齢的關係は必ずしも後者が年下とは限らない。このことについて、ある寝屋親は次のように話す。つまり、青年の親たちが寝屋親に頼みに行くときは、何人かの候補をあげて順にお願いに行く。最初は「年下の者」を考えていたとしても、先方の諸般の都合で必ずしも受諾されるとは限らない。その際、何人かの中には、親よりも年長者が含まれていて、結果的に親よりも寝屋親の方が年長者となることもあるというのである。いずれにせよ、親よりも寝屋親の方が若いことは青年にとっての話しやすさ、親しみやすさを生む一つの要因となりはするが、重要な点は寝屋親が青年たちとどのような接し方をするかであると思われる。

表2 三重県鳥羽市答志島の寝屋子の現状（1998年3月現在）

寝屋子	職業	先代	寝屋子誕生年	寝屋親歳 <sup>*1</sup>	歳差
吉平	漁業	×	71年	37歳	22年
〇ト	教師	×	72年	33歳	18年
増よむ	漁業	○	73年	35歳	20年
太郎市	漁業	○	74～76年	59歳	44年
仁八	漁業	×	75年	38歳	23年
金市	元会社員	×	75年	50歳	35年
井村	漁業	×	76年	34歳	19年
川エ	漁業	×	76年	43歳	28年
作よむ	漁業	×	77年	42歳	27年
佐次郎	飲食業	×	77年	46歳	31年
浜よし	菓子製造	×	78年	53歳	38年
作内	漁業	×	79年	44歳	29年
宏吉	石油販売	×	80年	38歳	23年
久太郎	漁業	○	81年	36歳	21年
佐良	大工	×	82年	40歳	25年
幸康	漁業	×	83年	26歳	11年

\*1 標記されている歳は寝屋親を引き受けた時の年齢である

### (3) 寝屋親の役割

寝屋親は寝屋子を受けている10年あまりの間に、楽しい思い出だけでなく、社会で生きていく上で教訓となるもの、礼儀などを伝えていく。これらのことは実の親が担えばよいという現代的な考え方もある。しかし、青年期の多くの親子でみられるように、この時期の親子関係が人生の中で一番難しいときでもある。そのような時期に寝屋子制度があることは、逆に実の親の負担を軽くするだけでなく、青年たちの親理解を確実に進める手助けとなる。先にも述べたように、親たちは自分よりも年下の寝屋親に頭を下げる。それはある意味で「私たちは息子たちと歳が離れているので若い者の感性に敏感でなくなってきている。いくらこちらが正しいことを言っても息子は反発するだけで聞いてくれさえない。どうか私たちよりも若いあなたに私たちの息子の教育をお願いしたい」と言っているようなもので、それを答志社会の制度としているため、それを実行するのが当たり前になっているのである。逆に考えると、青年宿の制度がない現代社会は、よほどの注意をしないと、さまざまな親子の問題を親子だけで抱え込んでしまうことにもなりかねない。寝屋子制度が現代に逆照射する問題提起でもある。

寝屋親との関係は生涯続くが、その代表的なものとして、結婚式の際に寝屋子の仲人になることである。通常、日本では結婚式の仲人は1組であり、多くの場合、仲人は夫の仕事関係の関係者になる。答志においてもその点は同様であるが、異なる点は仲人が2組である点だ。つまり、通常の仲人に加えて、寝屋親夫妻が仲人となるのである。披露宴のひな壇に向かうと、中央の新

郎新婦をはさんで左側に一般的な仲人夫妻が、右側に寝屋親夫妻が仲人として並ぶ。そしてその後は、夫婦だけでなく、生まれてきた子どもたちも含めてその育ちを見守っていくのである。

## 6. 現時点でのまとめ

これまで述べてきたことに加えて、これまでの聞き取り調査と伝統行事への参加観察を行ってきた結果、三重県答志島の寝屋子制度の特徴は次のようにまとめることができる。

- ①過去には同じ宿に入る青年は年齢が異なっていたが、現在では学校と同じ学年ごとに分かれている。
- ②中学卒業と同時に宿に入るが、島外の高校や大学、職場に通うこともあるため、現在では週末にしか宿に集まらない。
- ③現在、答志には15前後の寝屋があり、それぞれ職をもった一般家庭（寝屋親）が15～27歳までの青年（寝屋子）を受け入れている。
- ④寝屋親と寝屋子の年齢差は幅があるが、年齢がある程度近い方がよいという通念がある。
- ⑤過去には姫島の夜這いとよく似た「娘遊び」という男女交際が地域の中で認められていた。
- ⑥地域には年齢階梯に沿った年齢集団が存在し、ある程度独立性が保たれている。
- ⑦毎年行われる神祭は多くが青年団によって企画・準備・運営されるが、20年に一度の御木曳祭は前回、前々回に青年の代表であった者が指導にあたる形で地域の文化継承がなされている。

そして、特に実の親子関係と寝屋親との関係を比較すると、次のような両関係の特徴が描き出すことができる。

- ①漁業者の親子の場合、職業的には、青年は父親の船に同船して周辺の仕事を手伝いながら父親から徐々に漁業技術等を学んでいく師弟関係である。
- ②父親との関係が職業的師弟関係であるため、家庭生活における父親との関係も変化し、青年にとって父親は重い存在となる。
- ③年齢的に青年と父親の中間にある寝屋親は、父親に対する青年の両価的な気持ちを受けとめると同時に、父親の感じているであろう気持ちも伝えることによって両者を橋渡ししている。

## 7. 引用・参考文献

- Elkind, D. 1984 All grown up and no place to go. Addison-Wesley Publishing Company. 久米 稔・三島正英・大木桃代・岡村美奈（訳）1994 居場所のない若者たち—危機のティーンエイジャー— 家政教育社
- Erikson, E. H. 1982 The life cycle completed: A review. New York: W. W. Norton & Company. 村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）1989 ライフサイクル, その完結 みすず書房
- 堀田吉雄 1979 若者宿と娘宿—性教育の場として— フォクロア（伊勢民俗学会）No.41-43 1-21.
- 熊谷辰治郎 1942 大日本青年団史 細川活版所（日本青年館 1989 復刻版大日本青年団史 不二出版より）
- 久世敏雄 1972 青年と世代の断絶 斎藤耕二（編）現代青年の社会参加（現代青年心理学講座6）金子書房 Pp.3-52.
- 三重県民室 1971 島を守るたくましいネヤコー伊勢湾に浮ぶ答志島— 県民グラフ61 14-15.
- 箕浦康子 1990 文化の中の子ども 東京大学出版会



- 宮本馨太郎他 1966 答志の民俗 宮本馨太郎(編) 三重県志摩地方の民俗調査—鳥羽市答志島, 志摩町和具・越賀— 立教大学博物館学講座民俗調査報告 2 3-30.
- 宮下一博 1995 青年期の同世代関係 落合良行・楠見 孝(編) 講座生涯発達心理学第4巻 自己への問い直し—青年期 金子書房 Pp.155-184.
- Lave, J., & Wenger, E. 1991 Situated learning: Legitimate peripheral participation. Cambridge: Cambridge University Press. 佐伯 胖(訳) 1991 状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加 産業図書
- 佐藤 守 1977 若者組の文化—伝統社会の青年文化— 松原治郎・岡堂哲雄(編) 青年—文化と生態—現代のエスプリ別冊 至文堂 24-43.
- Sullivan, H. S. 1953 The interpersonal theory of psychiatry. New York: W. W. Norton & Company. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鐘幹八郎(訳) 1990 精神医学は対人関係論である みすず書房
- 田嶋 一 1977 若者組と青年期教育 教育学研究, 44(2), 140-152.
- 多仁照廣 1984 若者仲間の歴史 日本青年館
- 高橋統一 1987 年齢階梯制 石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男(編) 文化人類学事典 弘文堂 Pp.572-573.
- 鳥羽市 1999 寝屋子物語 とば(鳥羽市広報誌), No.975 2-9.
- 鳥羽市史編さん室 1991 鳥羽市史・下巻 鳥羽市
- 豊島の地域文化を見直す会 1995 豊島の地域文化・養育文化を見直しその現代的意味を考える(要約) トヨタ財団(編) 身近な環境をみつめよう 第6回市民研究コンクール報告書 Pp.26-31.

[2013. 9. 26 受理]